幽霊の衣裳

田中貢太郎

三代目尾上菊五郎は怪談劇の泰斗として知られていた。其の菊五郎は文化年代に、鶴谷南北の書きおろした『東海道四谷怪談』を木挽町の山村座で初めて上演した。其の時菊五郎はお岩と田宮の若党小平、及び塩谷浪人佐藤与茂七の三役を勤めたが、お岩と小平の幽霊は陰惨を極めたもので、当時の人気に投じて七月の中旬から九月まで上演を続けた。

其の後天保になって菊五郎は、堺町の中村座の夏演戯で亦『四谷怪談』をやる事になり、新機軸を出すつもりで、幽霊の衣裳に就いて考案したが、良い考えが浮ばなかった。

ちょうど其の時、中村座に関係していた蔦芳と云う独身者がいた。それは、演戯茶房蔦屋の主翁の芳兵衛と云う者であったが、放蕩のために失敗して、吉原角町河岸の潰れた女郎屋の空店を借りて住んでいた。

蔦芳は中村座の開場が近くなったので、毎日吉原から通っていたが、某日浴衣が汗になったので、更衣するつもりで二階の昇口へ往ったところで、壮い男が梯子段へ腰をかけていた。蔦芳は自分にことわらないで、あがりこんでるのは何人だろうと思って見たが、夕方で微暗いのではっきり判らなかった。

「おい、おめえは何人（たれ）だ、其処（そこ）にいちゃ邪魔にならあ」
気の強い蔦芳は、いきなり足で其の男を蹴（け）っておいて二階へあがり、俳優（やくしゃ）のお仕着（しきせ）の浴衣を執（と）って来たが、おりる時にはもう其の男は見えなかった。
それから五六日して蔦芳は、亦（また）彼（か）の壮（わか）い男が便所の口に立っているのを見たので、其の日中村座へ往って其の事を話した。
小屋の者はそれを菊五郎に話した。幽霊の衣裳を考案していた菊五郎は、早速蔦芳を自宅へ呼んで、今度出たら着附を良く見ておいて知らしてくれ、骨折賃を二両出そうと云った。其の時の二両は可成な金である

から、蔦芳は喜んで幽霊の出現を待っていた。
すると中村座の初日の二日前の夜、其の幽霊が蔦芳の臥(ね)ている部屋へぬうと現れた。蔦芳はしめたと思って能(よ)く見た。二十四五の壮い男で、衣服(きもの)は浅黄木綿(あさぎもめん)の三つ柏(かしわ)の単衣(ひとえ)であった。蔦芳は夜の明けるのを待ちかねて、菊五郎の許(もと)へ駆けつけた。菊五郎はそこで小平の衣裳を浅黄木綿石持(こくもち)の着附にして、其の演戯(しばい)に出たので好評を博(はく)した。

　蔦芳の見た幽霊は、蔦芳が後で調べてみると、其処の女郎屋の壮佼(わかいしゅ)であった。其の壮佼の徳蔵(とくぞう)と云うのは、病気の親に送る金に困って客の金を一歩(ぶ)盗んだ。

因業者で通っていた主翁は、それを突き出したので徳蔵は牢屋に入れられ、其のうちに病死したが、其の徳蔵が曳かれて往く時着ていた衣服は、店の妓がやった浅黄木綿三つ柏の単衣であった。

（悟道軒円玉氏談）

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　　１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　　１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年8月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。